

### Ⅲ 5年間の研究開発を終えて

#### (1) 教育課程の研究開発の状況について

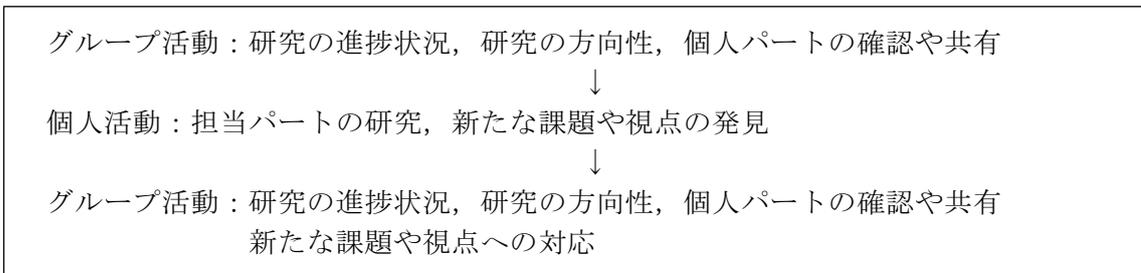
(ア) 「総合的な学習（探究）の時間」について

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
1 年生	2 単位	2 単位	2 単位	2 単位	2 単位
2 年生	1 単位	2 単位	2 単位	2 単位	2 単位
3 年生			2 単位	2 単位	2 単位

(注 1) 1, 2 年生は全員履修で 3 年生は選択履修である。

(注 2) 平成 28 年度より SGH に係る教育課程の特例により「社会と情報」を 1 単位とした。

上表のように、課題研究をより充実させていくために、平成 28 年度から 2 年生で単位数を 2 とした。2 年生における課題研究は 5 名程度のグループで実施している。このことにより、1 時間をグループでの活動、1 時間を個人の活動とした。



このように、グループ活動と個人活動を連動させることで、一人ひとりが役割や責任、課題意識をもって取組ができるようになり充実したものになった。

また、より深く研究を継続したい生徒のために、平成 29 年度から 3 年生で新たに「総合的な学習（探究）の時間」を選択できるようにした。毎年、5 名程度の生徒が選択しており、個人で研究を行っている。その成果を岡山大学で行われる「地域地理科学会」でポスター発表した。また、課題研究で身につけた GIS の基礎的技術を活用して、地域の小学生 20 名を対象に統計地図作成の指導を行った生徒や総務省主催 統計データ分析コンペティション 高校生の部 特別賞を受賞した生徒もいる。そして、ほぼ全員の生徒が特色入試（A0・推薦入試）で進学先を確定し自己実現につなげている。

#### (イ) 教材開発について 教材名「ラーメンで世界進出」

対象：1 年生 実施時期：1 学期

概略：社会とのつながりを意識させるために、「企業人による講演会」「ビジネス課題の発見」「進路学習」を融合した教材である。1 つのテーマに対して様々な系統（視点）からグループ単位で考察していく教材である。

内容：まず、グローバル企業である（株）力の源ホールディングス アジア事業本部 本部長から御講演をいただいた。その後、講演内容をリンクさせる形で、ラーメン会社を起業し、世界進出していく社長に対し「専門家として貢献できること（ビジネス課題の発見）」「貢献に対して必要な力の身につけ方（進路学習）」を文学系統、工学系統など 8 系統で研究を行い、ポスター発表するものである。

成果：生徒の感想で「各系統の発表を聴き、系統が異なっても実は繋がっていることがわかった」「同じ名前の学科でも研究内容が異なることがわかった」など、社会の

構図に触れたものもみられた。また、この教材は「1つのテーマから見つめる学問領域の広がり」「身近なテーマを学問につなげる」「課題発見と進路学習の融合」という点が評価され、Benesse Corporation の「探究ナビ」や「GPS-Academic 思考力UPガイド」に掲載された。多くの学校や関係者に普及できたと思う。

#### (ウ) 修学旅行×課題研究について

対象：2年生 実施時期：4月～6月

概略：本校の修学旅行は「マレーシア・シンガポール」「関東」の2方面で実施している。平成30年度の修学旅行から課題研究の取組を行っている。これは、事前準備を行い、訪問先で課題研究の深化をはかったり、ネットワークを拡げていくものである。また、グローバルな視点、ビジネスの視点を養うことも目的としている。

内容：「マレーシア・シンガポール」方面

- ①対象：シンガポール大学の学生，マレーシアの高等学校訪問先，ホームステイ先。
- ②内容：シンガポール大学の学生と半日程度市内散策する。また，マレーシアの高校を訪問し3時間程度，学校交流を行う。ホームステイは，夕方から翌朝まで行う。そのとき，課題研究に関するインタビュー（すぐに答えられるような内容）をする。例えば「ゴミの分類」「塾の存在や通塾率」「来日経験があれば，日本で困ったこと」など。文化や習慣の違いに着目する。
- ③事前取り組み：課題研究班で，事前に質問を考えておく。なお，英語で質問のやりとりができるように準備する。

#### 「関東」方面

- ①対象：企業，関係機関，大学など。
- ②内容：半日程度，企業，関係機関，大学などに訪問する時間がある。訪問班（研究テーマが近い）をつくり，課題研究に関するインタビューを行う。
- ③事前取り組み：課題研究班で，事前に質問を考える。訪問班をつくり，訪問先候補を考え，アポイントをとる。訪問計画書を作成し送付する。

成果：修学旅行のグループと課題研究のグループが異なるため，訪問班では他のグループの研究内容や取り組み状況を把握しながら訪問先の選定や質問事項をまとめいく必要がある。そのため，グループ外の議論の場が設定できたと思う。また，訪問時に直接質問することで，多くの有益な情報を得ることができたと思う。

#### (エ) 授業での取組について

本校ではSGH以前より多様な生徒に対応すべく，選択科目を充実させ，少人数教育を押し進めてきた。特に英語・数学では2クラスを3展開し，生徒の希望をベースにした習熟度少人数学習を行っている。SGHではこの少人数を利用し，グループ学習やペアでの学びあいが自然と行われ，数学ではジグソー法を取り入れたグループ学習や，英語ではグループでのディスカッションやペアワークによるトレーニングなど少人数をフルに活かした授業展開が多く見られるようになった。

このような授業での取組が課題研究でのグループ学習においても生徒の情意面でサポートになっており，場面がかわっても即座にグループ活動に取り組めるようになるだけでなく，質問の内容やそれに対する対応にも柔軟性が見られるようになり，即興性が以前よ

りも増している。

## (2) 高大接続の状況について

### (ア) 大学入試について

個性や適性に対して多面的な評価を行うAO入試や推薦入試に対して、国公立大学受験者数が、表からわかる通り増加している。その要因として、次の3点が考えられる。

	平成27年度 (1年目)	平成28年度 (2年目)	平成29年度 (3年目)	平成30年度 (4年目)	令和元年度 (5年目)
受験者数	37	44	39	58	69
合格者数	14	20	11	27	27

### ①授業改善

研究開発単位Ⅲ「GLOBAL STUDIES」では、通常の授業でも5つの資質・能力を育成すべく、各教科に落とし込み、その教科の解釈を元に各資質・能力の到達度目標を設定し、リスト化した「Global Can-do List」を作成した。

さらに、毎年統一テーマを決め、各教科が主体となって教科テーマを設定し、グローバル・リーダーの育成に取り組む。その際、大学教授や総合教育センターの指導主事にアドバイザースタッフを依頼し、1年を通じて、授業改善に向けた指導をしていただいた。全体テーマは次のとおりである。

- ・平成27年度「グローバル・リーダーを育てるための授業改善に向けた取組～授業で育てる5つの資質・能力～」：各教科での目指す生徒像と到達度目標の研究
- ・平成28年度「グローバル・リーダーの育成に向けた取組～Global Can-do Listによる授業改善～」：各教科で到達度目標表「Global Can-do List」を作成、運用
- ・平成29年度「グローバル・リーダーの育成に向けた取組～Global Can-do Listの活用と検証方法の研究～」：Global Can-do Listを授業に落とし込み、どう評価していくか授業と評価の一体化の研究
- ・平成30年度「グローバル・リーダーの育成に向けた取組～Global Can-do Listの活用と検証方法の開発～」：Global Can-do Listの活用法の研究と学習者のPDCAの研究
- ・令和元年度「グローバル・リーダーの育成に向けた取組～Global Can-do Listの活用と検証方法の開発～」：学習に向かう姿勢を育てる方策の研究（生徒の変容とPDCA）

この取組により、アクティブ・ラーニングを行う授業が増え、生徒の思考力や表現力などの向上。

このことは、後述(3)(ア)「GPS-Academic」参照。

### ②課題研究

課題研究において岡山大学の教授や大学院生に課題設定、研究方法、成果物等を専門的な知見で直接指導していただき多様な力の育成。そして、大学に対して学力だけではなく、課題研究を通して身につけた力や経験、その成果を評価してもらいたいと考える生徒の増加。

### ③国公立大学の入試システム

A0・推薦入試の定員の増加、後期入試の廃止や定員の減少などによる入試システムの変化への対応。

### (イ) 大学の単位履修制度

現時点で、大学の単位履修制度の設置はしていない。

### (3) 生徒の変化について

#### (ア) 外部評価 (GPS-Academic) について

GPS-Academic は「問題を解決する力」の現状を「思考力」「姿勢・態度」「経験」の観点で確認するアセスメントである。各力の定義は、次の通りである。

「批判的思考力」⇒「情報を抽出し吟味する」「論理的に組み立てて表現する」

「協働的思考力」⇒「他者との共通点・違いを理解する」「社会に参画し人と関わりあう」

「創造的思考力」⇒「情報を関連づける・類推する」「問題をみいだし解決策を生み出す」

表は、平成29年度入学生におけるデータである。「批判的思考力」と「創造的思考力」において、A段階の上昇度合いが、全国平均約13%に対して、本校は約23%と大きく数値を伸ばしている。様々な要因が考えられるが、先述した授業改善や課題研究の取組が主な要因であると考えている。一方で、「協働的思考力」は本校、全国とも全ての段階で数値が下降している。全国受験者数の大幅な増加、問題の質のブレが予想される。ただ、本校において、例年この力が低調なので、解決に向けた取組が課題である。

操山H30 2年生	批判的思考力		協働的思考力		創造的思考力		全国H30 2年生	批判的思考力		協働的思考力		創造的思考力	
S	3.4%	3.4%	0.4%	0.4%	3.4%	3.4%	S	1.0%	1.0%	0.5%	0.5%	1.8%	1.8%
A	39.8%	<b>43.2%</b>	25.9%	<b>26.3%</b>	51.9%	<b>55.3%</b>	A	29.9%	<b>30.9%</b>	18.6%	<b>19.1%</b>	42.1%	<b>43.9%</b>
B	52.6%	95.8%	65.4%	91.7%	40.6%	95.9%	B	57.6%	88.5%	62.6%	81.7%	48.2%	92.1%
C	3.8%	99.6%	7.5%	99.2%	3.8%	99.7%	C	11.1%	99.6%	17.1%	98.8%	7.2%	99.3%
D	0.4%	100.0%	0.8%	100.0%	0.4%	100.1%	D	0.4%	100.0%	1.2%	100.0%	0.7%	100.0%
合計	100.0%		100.0%		100.0%		合計	100.0%		100.0%		100.0%	

操山H29 1年生	批判的思考力		協働的思考力		創造的思考力		全国H29 1年生	批判的思考力		協働的思考力		創造的思考力	
S	0.0%	0.0%	2.2%	2.2%	2.2%	2.2%	S	0.2%	0.2%	0.9%	0.9%	2.0%	2.0%
A	20.1%	<b>20.1%</b>	29.7%	<b>31.9%</b>	29.0%	<b>31.2%</b>	A	17.2%	<b>17.4%</b>	21.7%	<b>22.6%</b>	28.5%	<b>30.5%</b>
B	66.7%	86.7%	60.2%	92.1%	52.7%	83.9%	B	61.7%	79.2%	62.1%	84.7%	48.7%	79.2%
C	12.5%	99.3%	7.9%	100.0%	15.8%	99.6%	C	19.4%	98.6%	15.0%	99.7%	19.4%	98.6%
D	0.7%	100.0%	0.0%	100.0%	0.4%	100.0%	D	1.4%	100.0%	0.3%	100.0%	1.4%	100.0%
合計	100.0%		100.0%		100.0%		合計	100.0%		100.0%		100.0%	

#### (イ) 外部評価 (GTEC) について

本校では英語の授業改善を進めており、GTEC for students (平成30年度からはGTEC) をひとつのアセスメントとして活用してきた。(1・2年は12月、3年は6月の受検) SGHがスタートして以来、授業改善の効果が少しずつ見られるようになり、特に1年生でのスコア520以上の人数や1年生から2年生にかけてのスコアが著しく伸びている。平成30年度からGTECに切り替え、4技能を測定している。WritingとSpeakingにおける伸びが大きく、表現語彙の獲得が大きな要因である。普段から表現することを前提にinputを重ねてきた成果であり、授業改善が順調に進んでいる。

グレード	スコア	1年生								2年生								3年生							
		H30年度		H29年度		H28年度		H27年度		H30年度		H29年度		H28年度		H27年度		H30年度		H29年度		H28年度		H27年度	
		単純	累計																						
7	710~	4	4	5	5	2	2	6	6	10	10	9	9	13	13	8	8	14	14	15	15	10	10		
6	610~	21	25	19	24	24	26	15	21	22	32	43	52	33	46	26	34	47	61	46	61	44	54		
5	520~	79	104	61	85	65	91	53	74	90	122	94	146	88	134	76	110	88	149	76	137	98	152		
4	440~	124	228	146	231	114	205	120	194	114	236	93	239	93	227	119	229	86	235	86	223	81	233		
3	380~	36	264	37	268	48	253	60	254	29	265	17	256	24	251	36	265	6	241	18	241	16	249		
2	300~	2	266	3	271	5	258	6	260	3	268	0	256	2	253	2	267	1	242	2	243	1	250		
1	0~	1	267	0		0	258	1	261	0	268	0	256	0	253	0	267	1	243	0	243	0	250		
	スコア平均	509.5		505.7		502.6		491.7		524.2		544.8		538.3		517.9		552.3		550.4		551.3			
	グレード平均	4		4		4		4		5		5		5		4		5		5		5			文科省調査
	対前年比									18.5		42.2		46.6		32.8		8.5		12.1		33.4			により未実施

GTEC（4技能）令和元年度3年推移					
CEFR-j	スコア /1280	2年（H30_12月）		3年（R1_6月）	
		単純	累積	単純	累積
B2	1190~	5	5	11	11
B1.2	1060~	16	21	29	40
B1.1	960~	44	65	49	89
A2.2	810~	139	204	104	193
A2.1	690~	56	260	25	218
A1.3	520~	8	268	0	0
A1.2	370~	0	0	0	0
A1.1	270~	0	0	0	0
Pre-A1	0~	0	0	0	0
平均		887.0(全国771)		946.4(全国784)	

(ウ) 校内アンケートについて

表は、平成28年度と令和元年度における生徒データである。表からわかる通り、項目①、③、④において、評価1、2の割合が大きく上昇している。この要因については、各中学校や受検生、保護者に対して本校のSGHの取組をしっかりと説明することで、SGHを理解し目的を持って本校に入学する生徒が増加してきたことや併設中学校もSGHとして未来航路の取組を行っていることが考えられる。地域に対しての普及にも繋がっていると思う。また、教材開発や授業改善等の取組の成果もあると考える。

評価項目	平成28年度					令和元年度				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
①SGH事業において求められているグローバル・リーダーの資質・能力とは何か理解している。	10%	43%	35%	8%	3%	20%	56%	17%	4%	2%
②将来的に、国際的な視野に立った活動や仕事をしたいと思う。	20%	32%	34%	11%	2%	21%	37%	33%	8%	2%
③未来航路のねらいを理解し、前向きに取り組んでいる。	13%	45%	30%	10%	2%	21%	50%	21%	4%	3%
④未来航路の活動を通して、高い目標を持つようになった。	10%	33%	39%	16%	2%	15%	40%	32%	9%	4%
1：よく当てはまる      2：やや当てはまる      3：あまり当てはまらない 4：全く当てはまらない      5：わからない										

(エ) SGH アンケート

5つの資質・能力に関する24のアンケート項目（1つの資質・能力に対して、5個程度のアンケート項目）を、4段階（1.全く当てはまらない 2.当てはまらない 3.ある程度当てはまる 4.当てはまる）で自己評価した。下表は、その平均である。

5つの資質・能力	R1 1年	R1 2年	R1 国際塾	H30 1年	H30 2年	H30 国際塾	H28 1年	H28 2年	H28 国際塾
幅広く深い教養	2.8	2.9	3.0	2.7	2.7	2.7	2.7	2.7	2.7
課題解決能力	2.9	2.9	3.1	2.8	2.7	2.9	2.7	2.7	2.9
コミュニケーション能力	2.8	2.8	3.1	2.6	2.6	2.9	2.5	2.6	2.8
リーダーシップ	3.0	2.9	3.1	2.8	2.7	2.9	2.7	2.7	2.9
社会貢献の意識	3.1	3.0	3.3	2.8	2.7	2.9	2.7	2.7	2.7

#### ①R1\_2年生について

H30\_1年生と比較して全ての資質・能力、アンケート項目で評価が向上した。特に評価が向上（+0.3ポイント）したアンケート項目が「幅広く深い教養：様々な課題や物事を全地球的な視野で考えることができる」と「コミュニケーション能力：英語でプレゼンテーションやディスカッションをすることができる」である。要因として、最初の項目については、課題研究の充実が考えられる。課題設定の指導方法改善で、しっかりとした課題意識を持った生徒が増えてきた。そのため、企業や関係機関にインタビューに出向くグループも増え、より教養や知識が深まったと考える。次の項目については、英語の授業改善で、授業中のペアワークやプレゼン発表の深化が考えられる。

また、H28、H30\_2年生と比較しても全ての資質・能力、アンケート項目で評価が大きく向上した。集団が異なるので、一概に比較はできないものの、H30と比較し特に評価の差（+0.4ポイント）が大きかったアンケート項目が「コミュニケーション能力：多様な人の考えや価値観を理解することができる」と「社会貢献の意識：岡山・日本・世界の課題を解決しようという意欲がある」である。この要因も課題設定の指導方法改善やインタビュー等が考えられる。

一方で、H30\_1年生とH30\_2年生と比較して、評価にほぼ変化がないアンケート項目が「コミュニケーション能力：英語でコミュニケーションをとることができる」である。前述の「英語でプレゼンテーションやディスカッションをすることができる」と相反する結果である。このことについて「プレゼンのように事前準備可能な内容は、英語での対応ができるが、英語によるより深いやりとりをする際の即興性が不足している」と分析している。この解決が今後の課題である。

#### ②R1\_1年生について

H28\_1年生と比較して全ての資質・能力、アンケート項目で、H30\_1年生と比較して「コミュニケーション能力：英語でコミュニケーションをとることができる」以外の資質・能力、アンケート項目で評価が向上した。集団が異なるので、一概に比較はできないものの、H30と比較し特に評価の差（+0.4ポイント）が大きかったアンケート項目が「社会貢献の意識：岡山・日本・世界の課題を解決しようという意欲がある」である。R1\_2年生と同じ傾向にある。学校として取り組むべき課題や進む方向性が明確になったと考える。

#### ③R1\_国際塾について

H28、H30\_国際塾と比較して全ての資質・能力、アンケート項目で評価が向上した。母数が少なく集団が異なるので、一概に比較はできないものの、H30と比較し特に評価が向上（+0.5ポイント）したアンケート項目が「幅広く深い教養：様々な課題や物事を全地球的な視野で考えることができる」「課題解決能力：論理的に課題の解決策を考え、評価・検証を行うことができる」「社会貢献の意識：人類が目指す平和で民主的な社会について理解している」である。一方で、今年度アンケート項目で低評価だった項目が「コミュニケーション能力：英語でプレゼンテーションやディスカッションをすることができる」である。今年度は、多くのセミナーやフォーラム、発表会に参加してきた。そのため、生徒達が多

様な経験や学び等ができ、全ての項目で評価向上に繋がったと考える。ただ、多くの素晴らしい発表にも出会うため、英語プレゼンが低評価になったと考える。

#### (オ) 留学について

短期留学については、平成30年度に増加している。また、長期留学者も出始めている。これは「トビタテ！留学JAPAN」や岡山県独自の留学支援事業の影響が大きいと考えるが、学校として留学の情報をしっかりと提供してきた成果でもあると考える。生徒や保護者の中に留学に対して、少しずつはであるが意識が芽生え始めている。そして、より意識向上を目指して、令和元年度に「アジア高校生架け橋プロジェクト」にエントリーをした。

	平成27年度 (1年目)	平成28年度 (2年目)	平成29年度 (3年目)	平成30年度 (4年目)
短期留学者数	0	2	0	6
長期留学者数	0	0	1	1

(注：短期留学者数は、10日以上で姉妹校除く)

#### (4) 教師の変化について

表は、平成28年度と令和元年度における教員アンケートのデータである。表からわかる通り、項目①からSGHの取組に対して、教員のベクトルが揃ってきている。ほとんどの教員が1サイクル(3年間)したことで実際に経験したことが大きいと考える。そのため、項目②のように教員と生徒の間でイメージのズレが小さくなってきており、多くの教員からSGHに対する意見が出るようになってきている。また、項目③からICT機器利用者が増えている。授業改善の取組成果の表れであると考えられる。

評価項目	平成28年度					令和元年度				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
①SGH事業において求めるグローバル・リーダーの資質・能力の育成を意識して日頃の教育活動を行っている。	29%	58%	10%	0%	3%	40%	54%	6%	0%	0%
②教員と生徒の間で、グローバル・リーダーのイメージが共有されている。	10%	42%	40%	6%	2%	17%	42%	33%	6%	3%
③授業にPC、書画カメラなどICT機器を有効に利用している。	56%	34%	8%	0%	2%	63%	31%	4%	2%	0%
1：よく当てはまる      2：やや当てはまる      3：あまり当てはまらない 4：全く当てはまらない      5：わからない										

#### (5) 学校における他の要素の変化について

##### (ア) 授業の変化

表は、平成28年度と令和元年度における生徒データである。表からわかる通り、項目①、②の評価が上昇している。8(4)で、ICT機器利用や授業改善に触れたが、ICT機器を利用した授業は、項目③、④からわかる通り、生徒にとって有益なものになってきている。授業改善が、良い方向に進んでいると考える。

評価項目	平成28年度					令和元年度				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
①授業に積極的に参加し、充実した学習ができています。	20%	55%	19%	4%	1%	25%	54%	15%	3%	2%
②授業は、進路実現のための学力向上に役立っています。	37%	47%	12%	3%	1%	44%	44%	8%	3%	2%
③授業でPC、書画カメラなどICT機器が活用されている。	42%	44%	10%	2%	1%	52%	36%	8%	2%	2%
④PC、書画カメラを利用した授業は、テンポがよく分かりやすい。	28%	49%	16%	4%	2%	36%	48%	11%	3%	3%

1：よく当てはまる      2：やや当てはまる      3：あまり当てはまらない  
4：全く当てはまらない      5：わからない

(イ) 保護者の変化

表は、平成28年度と令和元年度における保護者データである。表からわかる通り、項目④の評価が上昇している。これは、HPの更新頻度を増やし内容を改善したことが要因であると考えられる。そのため、項目⑤の変化が低調であるが、項目①の評価上昇に繋がっていると考える。項目①の評価上昇は8(3)(ウ)で触れたことも大きいと考える。

また、項目②③については、8(3)(ウ)や8(5)(ア)で触れた通り、生徒の立場から授業や未来航路の取組評価が上昇しており、保護者の立場からも同様の評価を得ることになった。SGHの取組が、しっかりと保護者にも伝わり評価していただけたと考える。

評価項目	平成28年度					令和元年度				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
①SGH事業において求められているグローバル・リーダーの資質・能力とは何かということについて知っている。	11%	44%	27%	11%	7%	24%	51%	21%	2%	3%
②子どもは、未来航路に積極的に取り組んでいる。	19%	39%	29%	8%	5%	23%	48%	20%	4%	6%
③子どもは、学校の授業に前向きに取り組んでいる。	37%	43%	17%	1%	1%	40%	47%	9%	3%	1%
④ホームページなどで学校からの情報発信が効果的に行われている。	31%	45%	15%	2%	6%	40%	48%	6%	0%	6%
⑤学校からの情報は子どもを通じて伝わっている。	21%	50%	23%	5%	1%	22%	53%	19%	4%	3%

1：よく当てはまる      2：やや当てはまる      3：あまり当てはまらない  
4：全く当てはまらない      5：わからない

(6) 課題や問題点について

3つの研究開発単位について、課題や問題を示す。表は、生徒・保護者データである。

評価項目	平成28年度					令和元年度				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
①将来的に、国際的な視野に立った活動や仕事をしたいと思う。(生徒)	20%	32%	34%	11%	2%	21%	37%	33%	8%	2%
②家庭学習を毎日計画的に行っている。(生徒)	16%	39%	32%	11%	2%	17%	38%	32%	11%	2%
③子どもは、家庭学習を毎日計画的に行っている。(保護者)	21%	41%	28%	9%	1%	21%	42%	28%	6%	3%
④自己の教養を深め、各教科・未来航路の学習や進路について考えるために学校の図書館を利用している。(生徒)	8%	19%	36%	34%	3%	10%	19%	35%	31%	4%

1：よく当てはまる      2：やや当てはまる      3：あまり当てはまらない  
4：全く当てはまらない      5：わからない

(ア) 研究開発単位Ⅰ「未来航路」

課題としては、高い目標、課題研究における課題設定、研究方法である。

まず、高い目標について、8(3)(ウ)で、未来航路の活動を通して、高い目標を持つ生徒が増加したことを説明した。項目①の評価や志望校調査の結果から、生徒にとっての高い目標とは、難関大学や医歯薬等の難関学部をさしていることがわかる。職業観レベルでのグローバルな高い目標は、あまり変容がない状態である。この高い目標の育成が課題である。

次に課題研究について、毎年、課題設定に多くの時間を必要とする現状がある。課題が決まっても、研究途中で変更や再設定するグループもある。様々な手立てを講じているが、大きな改善に繋がっていない。項目④からわかる通り、知識のなさ、すなわち関連図書の読書量の少なさが原因の1つであると考ええる。そのため、課題(テーマ)があまりに壮大である、研究のイメージや道筋がわからない、課題(テーマ)を絞り込めないことになっていると考ええる。また、SGH指定当初、研究方法については、インターネットを中心とした調べ学習が中心になるグループが多かった。フィールドワークやインタビュー等は、8(1)(ウ)で示した修学旅行の取組を始めてから増加する傾向にあるが、十分とは言いがたい。読書量の増加、フィールドワーク等をする時間や場所の設定が課題である。

(イ) 研究開発単位Ⅱ「SOZAN 国際塾」

課題としては、全校への普及、持続可能性である。塾生数は、SGH初年度1年4名、2年13名であったが、SGH最終年度1年20名、2年25名となっている。意欲のある生徒が多く入塾するようになってきている。グローバル合宿や海外研修、Global skills Training等プログラムも充実してきている。

まず、普及について、様々なプログラムを受講した塾生が、その知識や経験、ノウハウ等を塾生以外の生徒へ十分普及できていない状況がある。学園祭や課題研究発表会等で、取組を発表しているが、思考過程や研究過程、そこから生じる新たな課題など他の生徒にとって栄養となる部分について十分に伝え切れていないと考える。発表や報告だけでなく、課題研究の活動の場を通して普及できるシステムを考える必要がある。

次に、持続可能性である。一部のプログラムは、予算があるからできるプログラムである。自走できるように、プログラムを整理していくことが課題である。

(ウ) 研究開発単位Ⅲ「GLOBAL STUDIES」

課題としては、まず家庭学習である。8(5)(ア)(イ)で授業の変化について触れたが、項目②、③からわかる通り、家庭学習について生徒、保護者とも変化がない。学習に対しての興味・関心は、向上してきていると考えるが、実際の行動に現れていない状況である。家庭学習に繋がる授業改善をしていく必要がある。

また、本開発単位では、毎年11月に教育研究会として公開授業と取組に対する研究協議を行ってきた。校外外に呼びかけ、本校での取組を広く発信するとともに、特に校内では教科の枠を越えて、互いの指導法や授業で育成する資質・能力を共有し、学校全体の取組となるように様々な機会を利用して呼びかけた。この5年間の参加人数は次のとおりである。

### 教育研究会(公開授業)参加人数(全教科合算)

	アドバイザー リースタッフ	校外 合計	校内 合計	合計
H27	10	65	110	185
H28	13	63	136	212
H29	12	84	119	215
H30	11	39	128	178
R1	9	60	124	193

校内的には教科の枠を越えて、互いの授業を参観する習慣が芽生えているが、校外からの参加者が少なく、普及という点では課題が残る。また、各教科で設定した5つの資質・能力の到達度目標が妥当であるかどうかの検証は難しい。授業を行いながら生徒観察を継続し、授業で測れる資質・能力をもう一度設定し直す時期が来ている。

#### (7) 今後の持続可能性について

##### (ア) 研究開発単位Ⅰ「未来航路」

課題研究をSDGs主体のものに変更して、現在の取組を継続予定である。その際、課題研究について、現在は2年生で実施しているが、令和2年度入学生から1年生10月から課題研究を始めて2年生9月に終了する予定である。このことで、2年生6月の修学旅行における課題研究の取組がより効果的になると考える。なお、岡山大学の教授や院生の方の指導については、継続できるように関係者で協議していく予定である。

##### (イ) 研究開発単位Ⅱ「SOZAN 国際塾」

8(6)(イ)で示した通り、予算を必要とするプログラムについて整理する必要がある。校内で実施可能なプログラムは、体制作りを行い、難しいプログラムについては、関係者で協議していく予定である。なお、令和2年度入学生から全員がChromebookを購入することが決定し、令和元年12月には校内Wi-Fi環境が整備された。このことで、令和元年度に姉妹校締結したオーストラリアにあるSacred Heart CollegeとWeb会議システムを利用した新たな取組が可能となる。プログラム開発が課題である。

##### (ウ) 研究開発単位Ⅲ「GLOBAL STUDIES」

次年度からChromebookの導入やSDGsを柱とした課題研究がスタートする。それに伴い、Global Can-do Listの見直しを行い、さらなる授業改善へ繋げていく予定である。